

令和 2 年 7 月 10 日現在

機関番号：14601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04551

研究課題名(和文)協働省察を核とした共同的学びに基づく大学院・学部授業モデルの開発

研究課題名(英文)Development of graduate/undergraduate lesson model based on collaborative learning centered on collaborative reflection

研究代表者

中井 隆司 (NAKAI, Takashi)

奈良教育大学・教職開発講座・准教授

研究者番号：90237199

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は協働省察を核とした共同的学びに基づく大学院・学部授業モデルを実証的に開発し、教職大学院生・学部学生の職能成長や教師としての実践的知識に及ぼす影響を検討しようとするものである。現職教員院生と学部卒院生、学部学生同士がそれぞれチームを構成し、協働で授業づくりから授業省察までを行う過程で記入した省察コメントを分析した。

得られた主な結果は、以下の通りである。1. 省察内容・レベルは大部分が「代案」である。2. 「授業についての教師の知識領域」の大部分が「教授方法に関する知識」である。3. 学習者中心の授業映像は、教室の後ろから撮影した授業映像より学習者の描写割合が高い。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教師を目指す大学院生・学部学生が教師として自ら成長することができる能力である省察を核とした授業モデルを開発するために、教職大学院生及び学部学生が実施した模擬授業や実習授業を見て書き込んだコメントを分析した結果、その内容はほとんどが「代案」で、「教授方法に関する知識」に基づいて記入されていた。また、コメントを記入するために見る授業映像は学習者を中心に撮影された映像の方が教室の後ろから授業者を撮影した映像より学習者の具体的学習状況を描写するうえで効果的であった。これらの結果は、今後、省察を核に教員養成カリキュラムを開発するうえで貴重な資料となる。

研究成果の概要(英文)：This study is to develop a graduate school/undergraduate lesson model based on collaborative learning centered on collaborative reflection, and to make clear the effects of the teachers' professional development and practical knowledge of them as a teacher. We analyzed the reflection comments made in the process of in- & pre-service teachers, and undergraduate students, each forming a team and working together from class preparation to class reflection. The main results obtained are as follows. 1. Most of the reflection contents/levels are "Improvement". 2. Most of the "teacher knowledge area about lessons" is "knowledge about pedagogy." 3. The lesson-centered video of the learner has a higher depiction rate of the learner than the lesson video taken from behind the classroom.

研究分野：教師教育学

キーワード：協働省察 授業連携 省察コメント 実践的知識 プログラム開発 省察力 授業観察 撮影のアンクル

1. 研究開始当初の背景

2012年8月に「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」が中央教育審議会から答申された。この答申以降、教員養成系大学・学部・大学院で教師の実践的指導力の獲得を目指して各教科で模擬授業等を取り入れた教員養成カリキュラム開発が盛んに行われるようになっていく。

一方、ショーンが「活動過程での省察」を実践の中核とみなす専門家像として「反省的実践家」を提唱し（佐藤・秋田 2001）、日本教育大学協会が教師の力量の中核に「教育実践を科学的・研究的に省察する力」（日本教育大学協会 2004）を位置づけて以降、教師の授業を省察する力を育成する教員養成カリキュラムの開発も急速に進んでいる。これらを概観してみると総じて、近年の教員養成では実践的指導力向上を目的とした模擬授業の内容・方法の検討やその効果の研究から授業の省察力を中心とした模擬授業と省察の関係、省察の内容に関する研究、そして、省察を核としたカリキュラム開発に関する研究へと、その中心的研究課題が推移していることが伺える。特に、授業を省察する力を核としたカリキュラム開発では、学生の省察力向上を目指した個々の授業内容・方法や実習の開発からコルトハーヘンの示すリアリスティックアプローチの考え方（武田 2010）に基づいた学部授業、教職大学院全体のカリキュラム開発に至るまでその内容は多種多様である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、このような国内外の教師教育改革を踏まえ、協働省察を核とした共同的学びに基づく大学院・学部授業モデルを実証的に開発するために、現職教員学生と学部新卒学生、学部学生がそれぞれチームを構成し、協働で授業づくりから授業省察までを行うことで、大学院生同士・学生同士の共同的な学びを創出し、そのことが教員を目指す大学院生・学部学生の職能成長や教師としての実践的知識に及ぼす影響を検討しようとするのである。

3. 研究の方法

(1) 大学院授業モデルの開発

①対象：対象者は、本研究への参画と省察コメントの使用に書面で承諾を得た学部卒院生 32 名（2017 年度は 12 名、2018 年度は 8 名、2019 年度は 12 名）と現職教員院生 20 名（2017 年度は 6 名、2018 年度は 8 名、2019 年度は 6 名）の計 52 名である。

②教職大学院における授業モデルの開発：図 1 は「学校実践省察」を中心に、「授業力基礎演習」、「課題探究実習 I」、「課題解決実習 I」の 4 つの授業科目で連携した年間スケジュールである。「授業力基礎演習」では、前期に学部卒院生が教員免許状の学校種に応じた授業づくりと学習指導案づくりを改めて学んだ後に模擬授業・振り返りを実施し、自身の授業力についての課題を把握する計画で授業が進められる。「課題探究実習 I」では、学部卒院生が年間を通じて週 1 回（午前中）、学校での児童生徒の様子及び授業観察を実施し、各自の研究課題が探究される。「課題解決実習 I」では、後期に 1 ヶ月間にわたり学部卒院生が自身の研究課題に基づいた授業実践に取り組み、研究課題の修正・焦点化を行う。そして、「学校実践省察」では、前期に学部卒院生・現職教員院生が授業についての省察の意味と方法を学んだうえで、学部卒院生が「課題探究実習 I」で観察した事例を持ち寄り、学部卒院生 2～3 名と現職教員院生 1～2 名で各学校種別にグループを構成し、各事例について協働省察を実施する。その後、「授業力基礎演習」で実施された模擬授業の録画映像を題材に同じグループで学部卒院生と現職教員院生が協働省察を実施する。後期は、学部卒院生が 1 ヶ月にわたる「課題解決実習 I」で実施した実践の中から典型授業を録画し、前期と同様、各グループの協働省察を実施する。そして、2 回にわたる協働省察でそれぞれが書き込んだ省察コメントの有効性について検討会が開かれ、そこでの意見を基に学んだ内容をポスターとして発表する。

このように 4 つの授業科目はそれぞれ独立した授業の到達目標・内容のもとで授業計画が作成・実践されているが、「授業力基礎演習」で実施する模擬授業映像、「課題解決実習 I」で実施する授業映像、そ

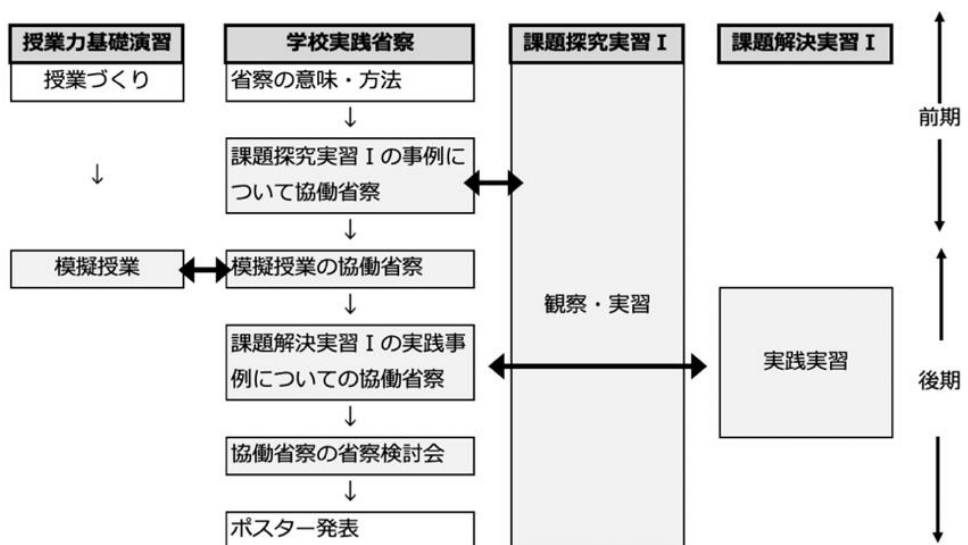


図 1 授業内容の連携及びスケジュール

表1 省察内容と省察レベルの分析に用いた「命題内容の分析カテゴリー」(佐藤他, 1990)

| カテゴリー | 定義 |
|-------------------|---|
| 教授に関する命題 | 命題内容が授業者・教授方法・教授内容などに言及している |
| 1. 事実 | 誰が見ても明らかな授業者の行為 |
| 2. 印象 | 授業者の行為への印象, 評価を述べているが, その根拠や理由は何も述べていない |
| 3. 推論 | 理由や根拠を伴って, 印象や評価を述べたり, 授業者の意図を推察, 代案の提示をする |
| 3-1. 意図 | 授業者の意図の推論及びその行為について理由を付して評価する |
| 3-2. 代案 | ある教授についてもっとこうの方がよかったと代案を述べたり, 次に何をするとよいかを述べる |
| 3-3. 見通し | 授業の展開を予測したり, その場面で起きていることが授業の中で持つ意味を述べる |
| 学習に関する命題 | 命題内容が生徒の行動・様子・学習内容などに言及している |
| 1. 事実 | 誰が見ても明らかな行動及び生徒の発言の反響 |
| 2. 印象 | 生徒の発言行為への印象や評価を述べているが, その根拠や理由は何も述べていない |
| 3. 推論 | 印象や評価の理由を述べていたり, 生徒が考えていること, 発言意図などを推察して述べている |
| (1) 教材理解に関連 | |
| ① 理解内容 | 生徒が教材について何を考えているのか, 理解しているのかを推察して述べる |
| ② 理解のてがかり | 理解の様子を示す表情や行動を捉えて述べている |
| (2) 教材理解には関連していない | 学習者に関して述べているが, 教材内容の理解とは直接関係のないことを述べている |
| その他 | 授業の内容とは直接関連のない発言 |

して、「課題探究実習Ⅰ」での観察事例を「学校実践省察」に持ち寄り、学部卒院生と現職教員院生が協働で省察し合うという意味で、「学校実践省察」を中心とする連携プログラムとなる。

③資料収集と分析の手順: 「学校実践省察」では「授業映像を用いた授業省察システム(中井・米沢 2012)」を活用し、学部卒院生の授業力基礎演習での模擬授業及び課題解決実習Ⅰでの授業実践について協働省察を行った。手順は次の通りである。①授業力基礎演習における学部卒院生の模擬授業に対して、学部卒院生及びメンターであるグループ内の現職教員がそれぞれ映像を視聴し、それに省察コメントを直接記入する。なお、メンターである現職教員院生は学部卒院生が記入した省察コメントを見ずに、同じグループの学部卒院生のコピーされた模擬授業映像に省察コメントを記入する。②学部卒院生は自身の省察コメントとメンターである現職教員院生によって書き込まれた省察コメントを見て課題解決実習Ⅰの実践に向けて改善点を考える。③学部卒院生は課題解決実習Ⅰで実践した授業から典型的な実践を録画し、学部卒院生は自身の実践映像に対して、現職教員院生はグループ内の学部卒院生の実践映像に対して模擬授業と同様に省察コメントを記入する。

なお、2018年度は前年度の結果に基づき学部卒院生が課題解決実習Ⅰの実践映像に対してメンターとしてグループ内の他の学部卒院生の実践映像に対して省察コメントを書き込む課題が追加され、2019年度は前年度までの結果に基づき、①②で観る模擬授業映像に以下の工夫を加えた。それまでは教室の後方から主に授業者を撮影した映像を省察で用いていたが、教室の前後から2台のビデオカメラを用いて収録し、映像編集ソフトを用いて教室の前方の側面から学習者及び教師と学習者のやりとり(相互作用)を中心に収録した映像の中に小窓で教室の後方から授業者を撮影した映像を組み込んだ(ピクチャ・イン・ピクチャ)。

実践映像に書き込まれた全ての省察コメントは3つのステップで分析された。第一ステップは記入された省察コメントの内容とレベルを把握するために、佐藤他(1990)によって開発された「命題内容の分析カテゴリー」(表1)に基づき省察コメント毎に分析された。このカテゴリーは「教授に関する命題」「学習に関する命題」「その他」の3カテゴリーに大きく分類され、それぞれに「事実」「印象」「推論」の下位カテゴリーと「意図」「代案」「見通し」及び「教材理解に関連」「教材理解には関連していない」等の関連下位カテゴリーに分かれている。

第二ステップは記入された省察コメントが教職大学院生のどのような実践的知識に基づいて記入されたものかを検討するために、吉崎(1987)が示した「授業についての教師の知識領域」(図2)に基づき記入された省察コメント毎に分析された。

第三ステップは省察に用いる授

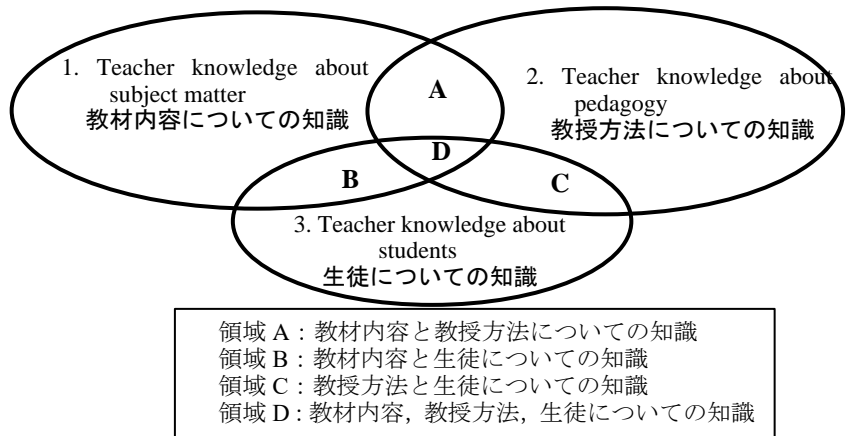


図2 「授業についての教師の知識領域」カテゴリー(吉崎, 1987)

業映像の違いが省察コメントにどのように影響するのかを検討するために、記入された全ての省察コメントへの学習者の具体的学習状況の描写割合が分析された。

この3つの分析枠を用いることで、教職大学院生の省察コメントの内容と様式、背景となる実践的知識、そして、教職大学院生の省察に用いる授業映像の違いが開発した大学院授業モデルにどのような影響を与えているか、がわかると考えた。なお、全ての省察コメントの分析は立場の異なる3人の分析者によって独立して実施され、メンバーチェックとトライアングレーション(Lincoln & Guba, 1985)を経て、有効性が担保された分析結果のみ採用した。

(2) 学部授業モデルの開発

①**対象**：対象者は、本研究への参画と省察コメントの使用に書面で承諾を得た学部学生2回生83名(2017年度は28名, 2018年度は27名, 2019年度は28名)である。

②**学部における授業モデルの開発**：学部では、指導案作成について学んだ後、学生が2~3人でチームを構成し、そのチーム内で協働して(a)模擬授業づくり, (b)全学生に対する模擬授業, (c)授業実施者による自身の模擬授業に対する省察コメントの記入(d)チーム内の他のメンバーによるメンターとして授業者への省察コメントの記入, (e)自己改善目標の設定, からなる授業モデルを開発・実施した。

4. 研究成果

(1) 大学院授業モデルの開発

①**省察コメントの「省察内容と省察レベル」**：学部卒院生による省察内容と省察レベル(図3)は、各年度ともにその大部分は「推論」の下位カテゴリーである「代案」であるが、映像の角度を変えた2019年度は「意図」が2017年度に比べて増えている。メンターである現職教員院生によるそれは、各年度ともに「推論」の下位カテゴリーである「意図」「代案」が大部分を占めており、その割合は各年度とも同様の傾向を示しており、2019年度に映像角度を変えても省察内容、省察レベルには大きな影響は認められなかった。

②**省察コメントの背景にある「授業についての教師の知識領域」**：学部卒院生及びメンターである現職教員院生の「授業についての教師の知識領域」(図4)はその大部分が「教授方法に関する知識」であり、それ以外には「教材内容

と教授方法に関する知識」「教授方法と生徒に関する知識」といった複合的知識もあるが、総じて教授方法に関連した知識に基づいていた。この傾向は各年度に共通しており、2019年度は特に、現職教員院生は「教材内容、教授方法、生徒に関する知識」を含めた複合的知識の割合が増えていた。

③**省察コメントにおける「学習者の具体的学習状況の描写割合」**：学部卒院生及び現職教員院生は、教室の前方から学習者を中心に収録した映像の中に小窓で教室の後方から授業者を撮影した映像を組み込

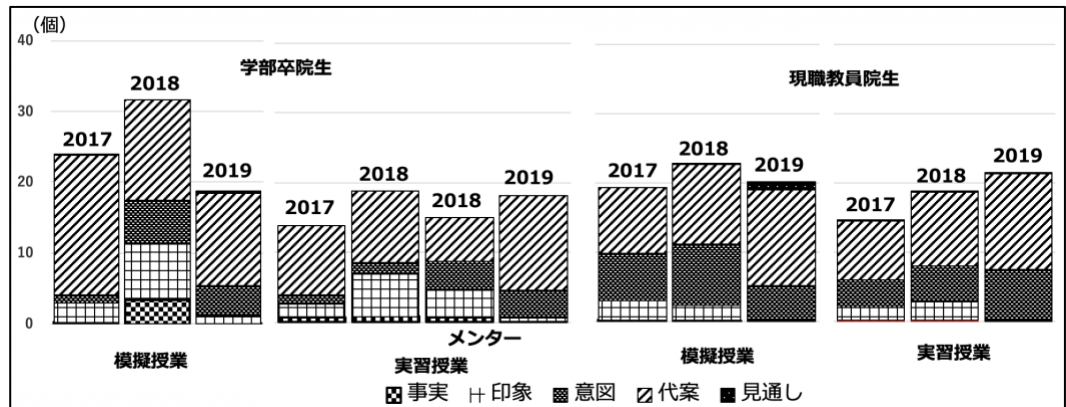


図3 省察コメントの省察内容・レベル

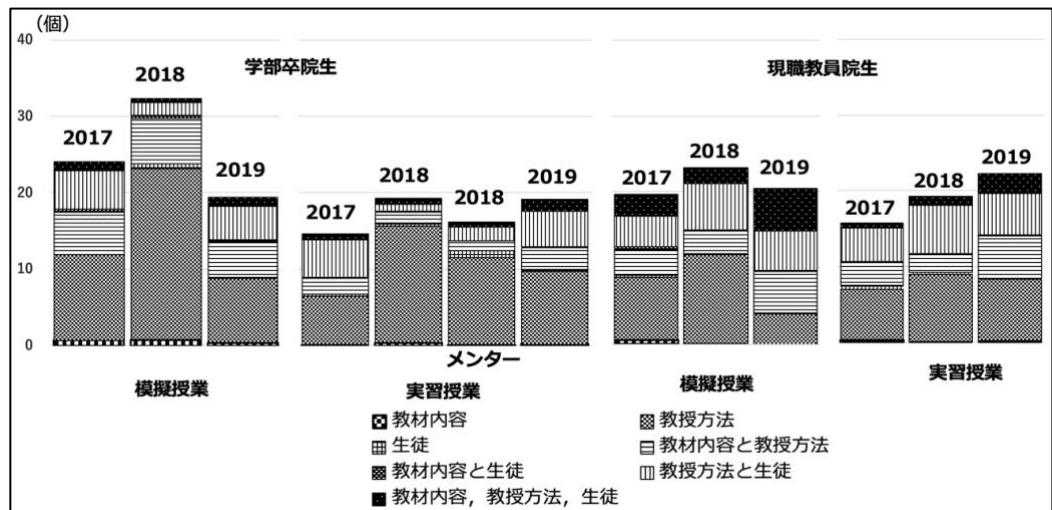


図4 省察コメントの背景にある「授業についての教師の知識領域」

んだ映像を観て省察コメントを記入した 2019 年度の模擬授業が他の年度に比べて学習者の描写割合が高く、教室の後ろから撮影した映像を観た実習授業でも 2019 年度が他の年度に比べて高い割合を示している (図 5)。

(2) 学部授業モデルの開発

学部学生 2 回生 83 名によって記入された省察コメントを大学院と同様に「命題内容の分析カテゴリー」及び「授業についての教師の知識領域」で分析した。現在、3 年間の変容を分析中にて詳細は省略する。

(3) 授業モデル開発に向けた調査研究

教職大学院の授業モデル開発に向けて、国内の 3 つの教職大学院を訪問し、授業見学及び聞き取りを通して、①院生の省察力習得・向上に向けた取組内容及びその工夫、②院生の省察力を備えた実践力の習得・向上に向けた取組内容及びその工夫、③院生の省察力の評価方法、等について情報収集を行った。その内容の詳細は、前田康二・中井隆司・吉村雅仁(2020) 教職大学院生における省察力育成カリキュラム—コルトハーヘンのリアリスティック・アプローチに基づく 2 事例について—。奈良教育大学教職大学院紀要「学校教育実践研究」12:61-64. に論文として掲載された。

(4) 大学院・学部の授業モデル開発に向けて

本研究では、協働省察を核とした共同的学びに基づく大学院・学部授業モデルを実証的に開発するために、現職教員学生と学部新卒学生、学部学生がそれぞれチームを構成し、協働で授業づくりから授業省察までを行うことで、大学院生同士・学生同士の共同的な学びを創出し、そのことが教員を目指す大学院生・学部学生の職能成長や教師としての実践的知識に及ぼす影響を検討した。

その結果、大学院では演習科目と実習科目を連携させる授業モデルにより、学部卒院生と現職教員院生の共同的な学びを生み出すとともに授業改善に向けた省察能力を育む可能性を提示することができた。一方で、大学院生のさらなる省察力育成には、教材、教授方法、生徒の複合的な実践的知識獲得に向けたカリキュラム改善への示唆も得ることができた。

また、学部では 1 つの授業内で講義と模擬授業を組み合わせるとともに、グループを構成し各グループ内で協働して授業づくりから協働省察までを実施する授業モデルを実践することで、授業時間と履修学生数との関係で、学生同士の共同的学びは活性化したが、省察能力の育成という視点では多くの改善点を得た。

今後は、他大学・大学院で実践している様々な取組も参考にしながら、学部学生、大学院生の「本質的な気づき」に基づいた省察能力獲得に向けた授業モデル、カリキュラム開発を進めていきたい。

<引用文献>

コルトハーヘン,F.A.J.編著：武田信子監訳(2010) 教師教育学—理論と実践をつなぐリアリスティック・アプローチ。学文社。<Korthagen, F. A. J. et al.(2001) Linking Practice and Theory: The Pedagogy of Realistic Teacher Education. Lawrence Erlbaum Associates>

Lincoln Y.S. & Guba E.G. (1985) Naturalistic inquiry, Sage.

中井隆司・米沢崇(2012)職能成長養成モデルに基づく教員養成カリキュラム改革の取り組み。日本教育大学協会研究年報 30:121-132.

日本教育大学協会(2004)教員養成のモデル・コア・カリキュラムの検討：教員養成コア科目群を基軸としたカリキュラムづくりの提案。日本教育大学協会会報 88: 251-344.

佐藤学・岩川直樹・秋田喜代美(1990) 教師の実践的思考様式に関する研究(1)—熟練教師と新任教師のモニタリングの比較を中心に—。東京大学教育学部紀要 30: 177-198.

ショーン,D.A 著：佐藤学・秋田喜代美訳(2001)専門家の知恵—反省的実践家は行為しながら考える—。ゆみる出版。<Schon, D.A.(1983)The Reflective Practitioner, How Professionals Think in Action, Basic Books.>

吉崎静夫(1987)授業研究と教師教育(1)—教師の知識研究を媒介として—。教育方法学研究 13:11-17.

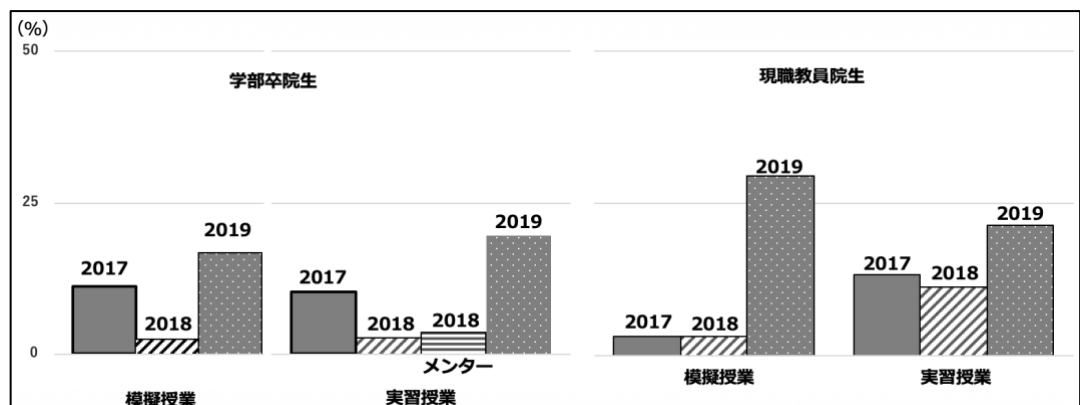


図 5 省察コメントにおける学習者の具体的学習状況の描写割合

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 中井隆司・吉村雅仁・前田康二 | 4. 巻 6 |
| 2. 論文標題 教職大学院生の省察力とその背景となる実践的知識の特徴と課題に関する事例的研究 - 授業についての省察を核に演習と実習を連携させた教職大学院プログラムの実践を通して - | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 奈良教育大学次世代教員養成センター紀要 | 6. 最初と最後の頁 43-51 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 前田康二・中井隆司・吉村雅仁 | 4. 巻 12 |
| 2. 論文標題 教職大学院生における省察力育成カリキュラム - コルトハーヘンのリアリスティック・アプローチに基づく2事例について - | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 奈良教育大学教職大学院紀要「学校教育実践研究」 | 6. 最初と最後の頁 61-64 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

| |
|--|
| 1. 発表者名 Takashi NAKAI, Masahito YOSHIMURA & Koji MAEDA |
| 2. 発表標題 The Development & the Improvement of a Program of Professional Development of the Graduate Students |
| 3. 学会等名 2019 the World Association of Lesson Studies International Conference（国際学会） |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Takashi NAKAI, Masahito YOSHIMURA, Koji MAEDA |
| 2. 発表標題 The Development of a Program to Enhance and Deepen the Reflective Thinking of the Graduate Students through the Collaborative Reflection in Lesson Studies |
| 3. 学会等名 Lesson study international congress（国際学会） |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|---|---------------------------------|----|
| 研究分担者 | 森 博文 (MORI Hirofumi) (00342379) | 京都女子大学・発達教育学部・教授 (34305) | |
| 研究分担者 | 吉村 雅仁 (YOSHIMURA Masahito) (20201064) | 奈良教育大学・教職開発講座・教授 (14601) | |
| 研究協力者 | 前田 康二 (MAEDA Koji) (60737419) | 奈良教育大学・教職開発講座・教授 (14601) | |